

生徒にとってよき教師であるための10の問い

——教職を志す日本の大学生と若き教師たちへのメッセージ：
フランスにおけるドロップ・アウトした生徒たちの支援に
関する研究と実践から得られた経験と教訓に基づいて——

フランソワ・ミュレール (François MULLER)¹⁾

2013年11月27日に、愛知県立大学・生涯発達研究所及び教育福祉学部教育発達学科の共催によって、「フランスにおける若者の『早期学校離れ』とその教育的対応—新たな政策と展開—」と題するフランソワ・ミュレール氏の講演会が開催された。氏は、フランス国民教育省の学校教育局研究開発・教育改革部門顧問として、フランスにおける「早期学校離れ」問題の研究と政策立案に中心的役割を果たしている研究者である。主催者の求めに応じて、当日の講演内容を圧縮・整理した原稿が、後日、氏より送られてきた。以下はその原稿の翻訳である。

過去10年間、フランスでは、(早期学校離れに対する) 有益かつ有効な解決策を探って、さまざまな経験が積み重ねられてきました。ここでは、私はあなたたちに“うまくいった”方策をそのまま紹介するよりも、むしろ、ここでの経験から得られた諸問題について語りたいと思います。あなたたちは、やがては教職に就くでしょう。こうした問題への自分の解答を見出すのは、あなたたち自身です。というのも、そうした解答こそ、あなたたちの生徒とその教育システムにもっとも適合した解答だからです。生徒たちと教育システムとの最良の仲介者、それはあなたなのです。

1. 自分の学校の歴史を知っていますか？

あなたたちの学校にはその歴史があり、あなたたちはその歴史に参加する一人一人です。これからの30年間、あなたたちはその学校を創っていく特別な存在になるのですが、それと同じぐらい、あなたたち自身がその学校によって造られる存在になっていくはずですよ。ですから、学校の歴史的経緯—ときには長いし、ときにはそうでない

場合もあるでしょう—を知ることは、単に当面の必要性からだけでなく、その学校のよき一員になるために、重要でもあり、戦略的にも必要なことなのです。

2. あなた自身は、かつてどんな生徒でしたか？

「私は、きみが理解できないことが理解できない」。教室の中でよく耳にする先生のこの発言は、教師すべてにとって、とりわけ新米の教師にとって、自分が生徒だったときにどんな学び方をしていたのかを自問してみることが重要なことを教えてくれます。“学校離れ”に関心をもてば、通常の単純な、型通りの資質とはまた別の職業的能力や組織が必要となるでしょう。学校《世界》との関係で生徒がどんな実際の、あるいは主観的な適応—不適応を起しているかを推し量ろうとすれば、教師一人一人、教師集団、学校の管理職は、より〈臨床的な〉分析を進めなければなりません。そうしてこそ、学校で得られる知識と生徒との関係を目に見えて変えることができるでしょう。

3. 「いいね」(という褒め言葉)を10通りの違った表現で言えますか？

日常の教育活動では、教師集団は学期ごとに手渡される通知表という《測定》方法を利用しています。しかし、たいていの場合、通知表は、生徒の学習の失敗を確認するだけか、「この点を直しなさい」という、さしたる効果も期待できない指示に終わっています。教師たちは誰もが共通に、実にさまざまな(生徒一人一人の)状況を分析することの困難を経験するのです。それよりは、実は(生徒の)よい面を取り上げてみることのほうが易しいのです。したがって、「いいね」という10通りの言い方を工夫して実際に使ってみるとよいでしょう。

4. 自分の教室の《雰囲気 (climat)》について考えたことがありますか？

生徒が遭遇する困難や、逆に教師が遭遇する困難は、いくつかの変数の複雑な方程式の産物です。それらの要因のひとつを取り上げるだけでは、単なる欠席から、ついには資格や免状もなしに学校教育を終えるに至るまでの過程をとっても十分には説明できません。そこへと至るまでには、複数の要因の絡み合いがあるのです。

それぞれの教師は、まずもって学校内部の諸要

因について問うことを避けてはいけません。学校内部の諸要因とは、教師の身の回りにある学校の雰囲気、教師の職場の雰囲気、教員どうしの関係の雰囲気、正しいことが正しいと言える雰囲気があるかどうかを指します。

5. 生徒についてどんなことを知っていますか？

生徒はとても早い段階から、学校での自分の立ち位置や学習に対するスタンスを作り上げていきます。生徒に耳を傾け、適切な条件作り時間に時間を費やしているか否かを、教師は常に自己点検すべきです。例えば、パリの《高校生のための補習施設》によって作られた2枚組のDVD (<http://www.parolesdecrochage.blogspot.fr/>)は、学校を退学し未だ復帰を果たしていない生徒たちと、わが子の退学という事態に遭遇した親たちのインタビューをまとめたものですが、そこでは、安心感、よい関係、親切でしっかりした大人、尊厳と公平性が、こうした生徒たちには必要であることが度々語られています。

フランスでよくある教師がもっているイメージとは反対に、親は責任放棄をしているわけではありません。たいていの場合、家庭の環境と結びついた外的要因—例えば、昼夜(睡眠)の日周期リズム、食事(施設内のどこに食堂を造るかの参考



になる)、精神刺激剤(アルコール、薬物など)、映像(インターネット、テレビ等)は重要です。

6. 学校の空間あるいは時間を変えられますか？

学校内でクラス担任となったら、学習内容や学習時の人間関係に止まらず、学習環境、つまり、学校の空間や時間のような条件についても常に問う必要があります。

教師集団は、管理職の支持も得て、望ましい学習環境を再創造するために、これまでの学校のテイラー・システム²⁾(時間割、教科、カリキュラム、評価、学習空間など)を根本的に見直さなければなりません。パリの《高校生のための補習施設》の例では、学校を離れて6カ月以上になる若者たちが彼らを喜んで迎えてくれる施設に戻ってきます。それぞれの若者は学習計画を中心に面接を受け、5つのさまざまな対策を提供してくれるこの施設の中に教育的な訓練の場を再び見出すのです。異なる幾つかの(施設内にある)“高校”は、同じ場所と教育資源を共有して教育活動を展開します。万人に開かれた同じひとつの場が、つまり、教師集団とボランティアの若者たちのよって整備され広場(Agora)と見做されたひとつの場が、さまざまな理由や要求によって学校を離れることになった生徒たちの出会いや憩い、勉強の場となるのです。

7. あなたの教育プランによって生徒は本気で勉強に取り組むようになると思いますか？

教師がよいアイデアさえもてば、それだけで生徒を学習へと連れ戻せるとは限りません。ジョン・ハッティ(John Hattie)の『目に見える学習(visible learning)』(Routledge, 2009.)を見ると、効果的な実践とは何かがわかります。メルボルン大学に勤務するこのニュージーランド人の研究者は、教育実践の効果に関する800を越す研究のメタ分析を行いました。教育は、以下のような教師の複数の職業的実践が一緒になって行われ、それらがシステムとして機能するほど、また生徒の学習支援に一貫性と継続性が保障されるほど、いつ

そう効果を発揮すると言えるでしょう。

- ・学習評価の実施
- ・教師の説明の明晰さ
- ・生徒へのフィードバック
- ・[教師と生徒の]関係の質
- ・メタ認知的ストラテジー(自己言語化や自らに問う姿勢)
- ・クラス内の諸問題の解決
- ・協同学習
- ・生徒の能力の検討
- ・具体例に基づく学習
- ・諸概念の心的図式化
- ・個別指導

8. 自分のクラスは外に開かれていますか？

教室はもはや閉じた場所として留まることはできません。というのも、クラスという組織単位は[否応なく生徒間に]ランク付けや成績不振を生み出すからです。何百という中学校では、既に何年も前から、生徒の数が溢れる状態となっており、教師集団は、学校の外の専門機関との連携や交流を視野に入れた、[学校離れに対する]よりよい予防の方途を探っています。以下の4つの特徴がシステムとして機能することが必要です。

- ・教師集団は、すべての生徒の教育可能性(éducabilité)を引き受け保障しなければなりません。「一人一人の生徒が最終試験にパスするまで教師は休めない」ということには、誰もが賛成するでしょう」。具体的には、この立場からすると、教育機関は、すべての生徒の結果に注意を向け、懲罰よりも学習支援のための評価手段や材料を備えていなければなりません。
- ・多様なアプローチの採用。考えるべきは「アプローチの多様化であり、[小手先の]救済手段ではない」。
- ・組織そのものの抜本改革を厭わないこと。
- ・教師間のコミュニケーションの重要性。「同僚の教師のクラスを定期的に見学する」。

根本的に変わるべきは、生徒に向けられる眼差しであり、教育場面で何が起きているかに向けられる眼差しなのです。

9. たえず創意工夫に努めていますか？

教師という職業の新米であっても、何とか乗り切るために、手持ちの材料でやり繰りしたり (bricoler)、新しい材料を編み出したり、授業や生徒への支援方法を新しく考え出したりすることになるでしょう。しかし、医者はその職を行うためには医学をもう一度発明しなければならない、ということをお前は考えたことがあるでしょうか？あるいは、エンジニアは橋を造るために5つの方法を再発明しなければならない、ということをお前は考えたことがあるでしょうか？あなたは、自分のことを教育の「エンジニア」と言えますか？

2011年以来、フランスの省庁間が政策的に連携して、FOQUALE (formation qualification emploi ; 人材養成・資格・雇用) という組織を立ち上げました。いくつかの改革を分析したあと、FOQUALE は発展のエンジニアリングについての提案を“革新的解決へのガイド”と称する冊子にまとめました。そのアプローチは、意図的に教育方法と組織を明確に結びつけた体系となっています。

10. “ずっと続ける”ということをおは思いましたか？

教師生活を始めてみてわかるのは、1カ月とか2年とかの時間をかけている余裕などなく、教師はしばしば思わぬ事態にすぐさま対処しなければならないということです。しかしながら、直接すぐの対応が、生徒にとってうまくいくとは限りません。だから、「続ける」ということを考えなければいけないのです (専門性を持続的に発展させるためにも)。

さまざまな試みを行っていくには、「ともかく続ける」ということが大事です。特に、あらゆる予算が削減される時期にあつては、さまざまな変革を職業技能的にも財政的にもうまく生みだしていくことが重要です。

まだ改革が不完全な途中にあつては、16歳以上の学校離れの若者たちに優先的に関心を向けなければなりません。ケベックでの実践から得られた以下の3つのアイデアが参考になるでしょう。というのも、それらのアイデアは“あたたかく迎える学校” *bienveillance scolaire* という概念による予防を目指しているからです。

- 1) 因子分析を経て作られた、7歳以後どんな生徒が学校離れする可能性があるかを調べる質問紙。
- 2) ケベックにおける学校に留まり学校で成功するための研究プログラムによって製作された一連のビデオ。不成功の要因のひとつとして能力の欠陥を挙げるのは幻想であることを、このビデオは訴えている。
- 3) 「学校に留まろう」 (*persévérance scolaire*) キャンペーンの実施。

ケベックでは、毎年2月の第3週に、「学校に留まろう」キャンペーンの日の行事が行われています。その行事の目的は、資格なしに学校を去る子どもたちをなくすことにあります。

以上10の問いが、あなた方やあなた方の教員養成校の先生たちにとって、すべての生徒たちの学校でのよりよい成功のためにどんな対策が可能でどんな実践をしたらよいかを考える機会となることを願っています。

(加藤義信 訳：愛知県立大学教育福祉学部)

注

- 1) フランス国民教育省研究開発部門顧問。以下のサイトを参照。<http://francois.muller.free.fr/diversifier>
- 2) 原語は *systeme tayloriste*。米国の F. W. Taylor が提唱した大量生産工場の管理方式。労働作業の分析によって無駄な動きを省いた最も効率的な労働を実現しようとするのだが、それがかえって非人間的な労働形態となることから、批判された。ここでは、学校があたかも製品を大量生産する工場のように機能してしまっていることを揶揄する表現として、この語が用いられている。